

博物館ボランティア養成セミナー（7）

## 「日本画」、その技法と歴史について

教育人間科学部 山本 眞也

教育人間科学部の山本です。芸術環境講座に所属しています。分かり易く言えば教育の美術科です。あさひ町の展示館が出来て、学部毎に展示室があるのですが、教育の方はなかなかまとまって展示できるものがなく、今までなんとかやりくりし、やってきたのですが、それでも美術科や書道科に少し作品や資料がありまして、何とか凌いでいる今の状態です。これは今年美術科で単独に作ったパンフレットですが、六月から一年間にわたっての展示です。第一回「本物・ニセモノ・模写・複製」展というのをやりました。これは皆さんご覧になられたと思いますが、私はそれに多少関わってまして、その話は後でしていきたいと思います。今は第二回目です。これは西洋画の教官です。現代美術、私はまだ見ていないのですけれども、何かそういうものが展示されていると思います。

次がパンフレットの一番裏にあります。二月から五月という大変に大雑把な期間で、私の作品展ということで展示をいたします。現場の部屋がそのような造りのものですから、どういう企画展示をしようかといういろいろ考えたのですけれども、展示空間がいいような悪いようなで今ひとつ難い所があります。できるだけ大きい方がいいのかなと思ひまして、此処の裏の写真に載っている四曲の屏風です、1999年のものを間違えてしまいました。それともう一点屏風があって、それから表紙のものが1m×1mの日本画です。点数としては五点から六点、花鳥に絞って展示をしたいと思っています。旧作ばかりではと思、間に合えば新作を一点描いて展示したいなと思っています。もし機会がございましたら、そのとき現場で話ができればと思っております。

この企画委員をやっている先生から何か講座をというお話がありまして、このようになりました。「日本画の技法と歴史について」という堅苦しいことで、私は「日本画の楽しみ」でいいと思ったのですが、それでは軟らかすぎるとこのようなタイトルになりました。皆さんは既に日本画とはどういうものなのかご存知で、説明するまでもないと思うのですが、私もよく「何をやっているのですか」と聞かれる、「絵を描いています」と、そうするとまず答えが「油ですか」と聞かれて「いや、日本画です」大体そういうパターンが多いのですが、日本画をご存知の方は「ああ、いいですね」とか、「どうい作家が好きですか」とか、いろいろ聞かれます。そうじゃないと、「日本画はお金がかかるのだそうですね」「絵の具が高いそうですね」そういう問や、「日本画は水墨画ですか」、そういうふうに言われることもあるのです。

日本という国の名前が付いていながら、油絵から見ると認識度が少し弱いのかなという

気がしないでもないでもありません。一年の学生が先ず入ったときに私の授業で、美術系はいろいろやるが、私は日本画が専門なので、日本画について何でもいから知っていることを書けと、アンケートをとるのです。作家や、作品でも良い、何でもいから、とにかくそういう人を知っていると、どこかで展覧会を見たことがあるとか、大体返ってくるのが、富士山の絵と返ってきて、時代や作者が分からない、葛飾北斎とか、そういうのがあります。そういえば田舎に古い絵があった。暗い絵だった。それは多分掛軸だと思うのですけれども、そういうのが割りと多いです。

それも間違いではないのですが、もう一寸表現の幅が広がって多様化して面白いのだよということを基礎実習で知ってもらえればとやりますが、終わって講評会でどうだったというと、まあ結構おもしろかった、良い感性を持っている学生は、少ない絵の具で何とかやりくりし独特の表現をしたりしています。古い日本画という固定観念が無くてそういう素材を使って自分の表現ができれば、それも一つの方法なんだという考えを持ってもらえれば良いなと思ってやっています。本来なら続けて四年間やれば良いのですけれど、此処では教育ですから、広く浅く一回の体験で終わる場合もあります。やりたいという場合には、二年生になってから所属ということで各自選択していきます。そうすると少しそういう素材にも触れて絵が描けるようになる。今日助手に来てもらっています、原さんですけども、大学院の2年生で優秀な私の学生です。よろしく。

今日はどのように日本画を分かってもらえるかなといろいろと考えました。そこで、ご存知の方もいらっしゃると思うのですけれども、改めてこのような画材で成り立っているのだということで、少しサンプルを持ってきました。その手助けとして簡単ですけども、「絵の具」と書いてある図を作りましたのでこれに従って説明していきたいと思います。

普通絵を描くというと油絵ですが、画材店に行くと画材が山ほどあります。油絵の具というのがチューブに入ってセットになってあります。それを買ってきてパレット上で溶いて、筆でキャンバスの上に描けば大体描けるのです。作家のアトリエ内の写真などを見ても、いかにも作家という感じでイーゼルが立っていて、絵を描いているというその雰囲気分かります。ところが日本画は様々な画料がありますので、私の部屋を見てもらえれば分かる通りめっちゃくちゃです。そこを通っても絵を描いているのか一寸良くわからない。とにかく散乱していて、作品も私の場合はあまり立てることがなく寝かせて描く場合が多いので、畳の上に描きかけの何かを置いたり、デッサンが散らかったりして足の踏み場も無いような状態になっている。どうも絵を描いているということが今一分かり難い。そういうイメージがあるようです。そういうことで先ず絵の具の方の説明をしたいと思います。

此処に図がありますが、上のほうに「絵の具」と書いてあって、「有色の物質(色の粉末)と展色材(接着剤)の混合物であり、両者は溶け合わない」これはどういうことかということ、絵の具の素は色の粉末ですが、水に溶いて塗っても乾くと落ちてしまうので何らかの接着剤が必要になってきます。それでなにかの接着剤と練り合わせるわけです。すると一見混

ざったように見えますが、実は接着剤がその色の粒子を包んでいるだけで、溶け合わないため混合物となります。それと溶け合うものがあまりにも微粒子で、水や油など、液体状のものと混ぜると溶け合い分離しなくなるというのが染料とと思ってください。色をつける母体といいますか、そういうものに大きく分けて「顔料」と「染料」があると、顔料は混ざらないもので、染料は混ざり溶け合って浸透性ができます。

もう一つ気になったもので、資料には書かなかったのですが、「塗料」というのはなにか、あれも色の素です。塗料と顔料は何処が違うのかと、考えましたが、素は同じなのだが目的がどうも違う。とにかく絵を描くためではなくて、例えば車の色あれは恐らくどのように色彩されているか分かりませんが、あれも色が出ていますから、顔料ではなくて塗料に分類されるのかなと思っています。いわゆる絵ではない。個人の絵画制作の目的に使うのではなくて、広く一般的に着色する、家の壁などを塗るのもあれも絵の具とは言わないでしょう。ペンキという、塗料の部類に入るのだと思います。まあ素は一緒です。ここの真ん中に顔料と、(色の粉末)と書いてあり、矢印がいろいろとあって、その矢印の方向に従って説明していきますと、真ん中に書いてあるものは接着剤で、いわゆる糊です。それによってどういう絵の具でどういう絵画技法が分かるのかというのを一寸図式にしてみたものです。

説明しますと、先ず接着剤がないと定着しません。一番真ん中の上の方に水と書いてあります。色の素は細かい粉末ですから、水を入れてかき回せば溶けたような状態になります。フレスコというのは技法なのですが、それには接着剤は要りません。いろんな色粉末を水で溶いただけで生乾きの壁面に描きます。その絵の具が吸収されます。このフレスコというのはいわゆる漆喰壁です。消石灰というものですけれども、壁に塗ってもすぐには乾きません。意外と乾燥が速くて約一日で乾いていきます。が、乾いていく途中で色の粉末を水で溶いて、描いていきます。壁は荒壁というか、紙みたいにつるつるしていませんので、染み込んで中まで浸透していきます。そして石灰ですから乾燥し時間が経つと、湿気を吸ったり吐いたりしながら、長い間に硬化してきて、鍾乳洞の鍾乳石が出来るみたいに、ある種の石灰の皮膜が出来て色の素を水で溶いただけなのに封じ込んで硬くしていくわけです。だから意外と堅牢です。日本にはこういう技法は、ありませんでした。

これに近いもので高松塚古墳で見つかった壁画を、フレスコ画といたりしますが、実はあれはフレスコ画ではなくて、乾いた漆喰壁に顔料を膠で溶いて塗ってあるものです。これは私、模写事業に参加させていただいたときに、本物を見なければいけないということで、実際に入って見ました。雑菌が入ってはいけないと言われ、白い服を着せられて、南の方は盗掘されて穴があいてそこから入りました。模型を作って入る練習をするのですが、入るときに足で蹴飛ばして壁を壊してはいけないと神経をつかいました。自分の分担の所だけ良く見た記憶があります。それを見たときに間違いなく岩絵の具きれいな群青で荒いものが塗ってありました。

その次に左回りで日本画を先に説明しましょう。膠というのがあります。その膠で顔料

を溶くとこれが日本画絵具になるのです。もう一つは「墨」です。墨は煤を膠で練って、練り固めて木型に嵌めて、抜いて乾燥させたものです。それに膠と多少香料が入っている物もあります。嗅ぐといい匂いがします。それを磨りおろして使います。膠とは分かったようで分からない。こういう細い棒状のものでこれを折って使うのですが、最近は粒状の物もあります。何から出来ているかということは皆知っている積りでいて、よく分からないものです。動物の皮を煮出して作るらしいのです。そうすると皮の脂肪が分泌され出てきて、それを何回も煮込んでいって乾燥させたもので、煮凝りだそうです。日本画だから日本独特の物だと思っていたら、世界中にありまして、うさぎから作られたフランス製のものもあります。形態が一寸違って板状になっています。以前は絵を描くためだけではなくて、工業用も兼ねていますから木工製品などの接着剤に使われていました。

今はボンドという合成接着剤が出来まして、あまり使うことがないのではと思います。これは物凄く優れている接着剤でして、何故優れているかという、くっついて又剥がすことが出来る。この間テレビを見ていたらある番組で「糊」と「接着剤」というものがあった、私は一緒のものだと思っていたのですが、これは違うものなのだとすることを始めてその時に気が付いたのです。それは経師屋さんが糊というのはくっ付いて剥がすことが出来るもので、接着剤はくっ付いたら剥がれないので、無理に剥がしたらくっ付けたものを傷めてしまう。それが接着剤で、我々は糊を使っているのだということを言うのです。なるほどなと思いました。木工製品、例えば古い筆筥や箱などでもこれだけでくっ付けていると乾燥し剥がれたりしますが、あれはまた膠で締め付ければくっ付くのです。

大きな仏像を作るときによせ木作りで中を空洞にします。その時に先ず雛形を作ってスライスしてそれを膠で張り合わせて彫って、それをお湯に浸けていると膠が取れてばらばらになり、断片のパーツが出来ます。それを拡大して、各部分を彫り込んでまた途中で膠でくっ付けるというようにして全体を作るというやり方が彫刻の方であるのだそうです。そういうふうにして、ある温度と水分を吸うことで軟らかくなってく性質があり、暖めれば溶けていく。だから膠とはそういうものです。

次にアラビアゴムです。アラビアゴムで色の素、顔料を溶いたものが水彩絵の具になります。アラビアゴムとは何か、ゴムというとタイヤのゴム、輪ゴムを想像しますが、一寸下を書いておきました。アカシア科の樹木の樹脂だそうです。アラビアゴムとして売っています。どういう形をしているかという、松脂を固めたような、一寸半透明なキャラメルみたいなものです。それを水に入れると軟らかくなり溶解します。それで溶いて描いたものが水彩画です。水彩というと、水彩画の画材なのかとそれだけで終わるのですが、制作には透明水彩と、不透明水彩と分かれていて、透明と不透明とは何処が違うのかということですが、これはアラビアゴムの量が多いと色が透明になるのです。それは摺りガラスが水で濡れると透けて見える、あの原理です。だから透明の糊が多いと乾いても糊の皮膜が出来ますから、色が透けるわけです。それが少ないと色の粉の状態が残って幕の感じで不透明になる。ただその量の多い少ないということですが。

次に、ダンマルガムです。これも良くわからないと思うのですが、ラワン科の樹木の樹液です。それで色の粉を、今度は水彩みたいに軟らかくしないで練り固めて乾燥させるのです。そうするとチョークやコンテのような状態になります。それで荒い画面に書けば色が付くわけです。そういうものだと思ってください。

次は卵とカゼインになります。これで色の素を溶くとテンペラ画になります。テンペラ画という名称を聞いたことがあると思いますが、これも日本になく、ヨーロッパです。向こうを旅行されて美術館に行くと山のように宗教美術絵画があって、古い絵は大体みんなテンペラ画で、板などに描かれてそんなに大きい作品は無いと思います。これは、卵テンペラと呼んでいるもので、卵の卵黄を小さな用品に入れて攪拌するのです。これは腐敗しますので腐敗止めに一寸お酢を入れます。そこで色の粉と卵黄を、大理石の練り台に出して、練り合わせる。それが絵の具になるわけです。だから大量に出来ないその日書く分とか、使用する分だけしか出来ない。大量に出来ないということは、広い面積を塗れないわけです。テンペラ画を、旅行先で特にヨーロッパの宗教画を良く見ていただくと、細い線の集合で立体を現すのです。ハッチングといいます。線を利用し何回も何回も微妙な色を重ねて行って、顔なら顔の表情の、陰影を付けて立体感を出していくのです。その線が分からないものもあります。それからカゼインというのがありますが、乳化剤と書いてあるだけで、私も良くわかりません。これも動物性の蛋白質です。卵もそうです。きっとこれは何かのやっぱり乳化した製品だと思うのですが、それが恐らく糊になるのだと、それで何を使うかによって卵テンペラとか、カゼイン、テンペラとかに分かれていくはずですが、出来上がったものは大体同じものです。

次に合成樹脂というのがありまして、アクリル絵の具類で、これは新しい絵の具になります。出始めたのは戦後のことか、戦前なのか分かりませんが、私が気づいたのは、学生時代です。使い難くて、水性ではあるし、油絵の具のようにチューブに入っていました。乾きが速く、後で一寸色を落としたいと思う時にはくっ付いてしまって落ちないし、どうも私には扱い難い絵の具であまり好きではありませんでした。この合成樹脂なのですが、化学性の接着剤で、顔料を練って作ったものだと思います。これはヨーロッパではなくてアメリカでできたのではないのでしょうか。このアクリル絵の具は多様な表現が可能で、水性なのに、油絵の具のような表現が出来るものですから、日本画をやっている連中でも下地はアクリルで、仕上げに従って岩絵具を使ったり、非常に幅広く使われるようになりました。若手作家たちが、あえて日本画とはいわないで、混合技法、ミックスメディアといっています。水性ですから、岩絵の具などとも相性がいいので、複合的に使えます。

次は蜜蝋、硬化油です。蜜蝋とは何かと調べたら、「蜜蜂の巣に含まれる蝋分を精製加工したもの」とありましたが、要するに蝋です。それと硬化油ですが、油というのはそのまま放置しておいても全然乾かないで液体状のものもあるし、空気に触れるとだんだん硬くなっていくものもあるわけです。それから初めから半練状態のようなものもありますので、さらさらしたものではなくて、やや硬めの油と考えてください。それと顔料を練り合

わせて出来ています。そういうものを通常オイルパステルというのですが、市販されているものに、クレヨンやクレパスとって、幼稚園の頃から絵を書くための画材です。

最後はポピー油、リンシード油と書いてありますが、これは植物油です。ポピー油というのは芥子の油です。リンシード油とはこれは亜麻仁油と言われてます。両方とも植物性で、それと顔料を練ったものです。植物油だからゴマの油でもいいじゃないかと考えるのですが、結局これは空気に触れて油が固まっていけないと駄目で、胡麻油とか菜種油で顔料は攪拌出来るかも知れないが、何時までたっても液体状で固まらない。そういう意味で油絵具が作り出されたのは、十六世紀か、レンブラントも油絵具で描いています。きっとテンペラが不自由なので、それに代わる、もっと早く大画面が描けるなど、いろいろ試行錯誤をへてこの油絵具が出現してきたのだと思うのです。そういう意味で、このポピー油とかリンシード油で溶いたものが油絵の具なのです。

そこで日本画の絵の具なのですが、一寸持ってきました。これは最も基本的な色です。「緑青」と「群青」です。自然にこんなにきれいな色があるのかとお思いでしょうが、群青がこの藍銅鉱という鉱物です。これは孔雀石とって装飾品として加工されますが緑青です。金茶という色があります。又、こういう石で名前は虎目石といます。これを砕いて使います。緑青と群青は日本に産出しないので輸入、昔は中国、今はアフリカなどから輸入して砕いて作っています。また奈良時代からこういう色が使われていますが、緑青や群青を使ってあるのは相当高価、当時としては輸入品ですから金などよりも高かったかも知れません。何しろ産出しないわけですから。

岩絵の具は自分で作ることが出来ます。こういう鉱物や、岩石、泥、土、それから金属の粉などを膠で練れば混ざり合って絵の具になるわけですから。この間佐渡に行って、この石を拾ってきました。よく道路際の崖が崩れていて、土が赤く露出している所などがあって、これは絵の具になるぞと思い、拾ってきました。これを荒く砕いて、この状態でも塗れない事も無いのですが、これを更に乳鉢で磨り潰して、選り分けていくとだんだんときれいな粉末になります。実際に使って見ましたが、非常に使い易いやすく私としてはいいかなと思っています。どうしてこうやって選り分けるかという、比重です。先ず出来るだけ細かく磨り潰すのですが、その段階で十分膠と混ざりますが、粒子がバラバラです。水をたっぷり入れて攪拌して沈殿の差を利用、荒いのはすぐ下に沈んでしましますが、その上澄みを順番に分けていくのです。細いものは一週間経ってもまだ沈殿しない、10日ぐらい放置してやっと上澄みが澄んできて下の方に溜まるのです。水を捨てて乾燥させると物凄く細かい粉末状になり、それが白といわれる岩絵の具になるのです。

今は絵の具屋さんに行くと千種類位あるといわれています。人工的に色が作られていて、どれを選んだらいいのか分からないくらいです。描いていますと、好きな色味がありまして、無くなったら補充するようなことをしています。そんなにあつたっても必要かどうか分からないのですけれども、江戸時代など人工的に作ることは無かったもので天然から作っていたわけです。ですから色数は多く無いはずで、それを何とかやりくりして

少ない色数から多様な色数をより工夫しなければなりません。それはこれからお見せする一寸変わった絵具にもあります。

絵の具の原料は岩石とか鉱物でした。白色ですが例えば白い大理石、石英などを碎けば真っ白な粉末が出来るので白い絵の具として成り立つのです。もう一つ日本では胡粉と言って、貝の殻、蛤や、牡蠣の殻、外側の黒い所を剥がして、内側の白い部分、それを磨り潰して水でより分けたものです。白色として使われています。このようにざくざくしているのですが、これはあまりにも粉末が細かいためにこういう状態になるのです。この胡粉の「胡」と西の方の呼び名なのですが、どうしてこれが胡粉という名称なのか、分かりませんが、中国から伝わってきたものだろうと思います。胡粉が出来る以前は白土と言って、泥ですが、出来るだけ白いものがあつたそうです。それを精製しながら使つたのですが、今はそういうものはなくて、白土と言う名前です。売っているものもありますが全然別物です。

その他、これは赤ですが、コチニールと書いてあります。これは虫、カイガラムシと通称言っています。アブラムシと言って菊の花などの茎の所にびっしりとくっついているものがありますが、そのようなものだと思って下さい。あれを乾燥したもので、磨り潰すとこういう赤い色になります。この前の状態を私見たことがあるのですが、本当に貝殻みたいになっていて、もっと汚い色のものががさがさ入っていました。それを磨り潰すとこういうきれいな臙脂色が出ます。もう一つは私がいまだに探しているのですけれども、「えんじ綿」というこういう綿の繊維に摺った汁を染み込ませて売っていたそうです。絵の具屋さんで聞くと「昔はあつたけれども今はもう無いよ」と言われて、絵の具でもあり染料でもあつたらしいのです。きれいな臙脂色の赤です。値段も高いのです。軽くてこれだけあつると結構使い勝手がありまして、きれいなピンク色などを出すのに重宝します。今のコチニールはどうやって出来ているか分かりませんが、無機物の他にこういう有機物もあるということです。

その他、これは「藤黄」といまして、ある種の樹液だと思うのですが、こういう塊で来ます。これはこういう棒状になっているのですが、竹の筒の中に樹液を溜めて乾燥させて割ると中からこういうのが出てくるのです。絵の具屋さんではこれをグラム単位で売っています。これも水で溶くときれいな黄色が出ます。これも昔から使われていたものです。だから胡粉に一寸これを混ぜるときれいな軟らかい黄色が、コチニールと混ぜると又不思議な色が出てきます。

それから墨です。墨は墨としても使いますし、胡粉に混ぜるときれいなグレーが出ますから色としても使います。そういう感覚で使っています。その他に日本画では独特ですけども、金属類で、金泥、銀泥です。金といつてもありがたい金だから捨てられなくて、筆に残ったものを湯で洗ひまして、筆から絞ってそれを乾燥して上水を捨てて、残りを最後まで使います。これは「焼金」と言うが、純度でいうと22金で純金までは行かないと思うのですが、そういう金です。それから「青金」、18金位だと思ひます。銀が入っているか

らやや青みがかります。こういうものが絵の具として、色彩の一部に使われます。それからその他に「箔」です。金箔、銀箔というものも絵の中にマチエールとして使いますし、古典絵画、例えば屏風などの背景に箔を使ったり、今に始まったものではなくて、古くから多用されているということです。

次は紙です。難しい言葉で言うと「支持体」、つまりキャンバスです。日本画の場合は何にでも描けるかといっても、そうは行きません。まず、「板」、「絹本」、「紙本」現在ではほとんど紙に描かれています。紙もいろんな紙があって、表現方法によって選びます。通常は「麻紙」とよばれる比較的丈夫な物が一般的です。今日は持ってこなかったのですが、障子紙の厚いようなものだと思って下さい。植物繊維で出来ていてその素はこれです。これは楮(こうぞ)で紙漉きの工房で貰ってきました。これを大釜で煮て木槌で叩いてぼろぼろにして水で流すと表皮がとれて、と言うようなことを何回もやって繊維にしてとろろ葵の汁を入れて紙を漉きます。それを上川村和紙工房から貰ってました。そうすると紙と言うのはどういうものなのかというのが分かると思います。

素材のことにしてもう一つ棒絵の具というのがあります。一寸サンプルを持ってきて、このように汚い色をしていますが、皿の上で水にとくときれいな臙脂色や、群青色が出ます。これは顔料の細かいものを墨と同じような作りで出来ている物です。膠で練って棒状にして固めたものです。墨のような要領で硯で溶いてもいいのですが、墨を使った硯ですと墨が必ず残っているから汚くなります。きれいな皿か、硯でもまだ使っていない硯を使うといいと思います。これの良いのは携帯用で例えばスケッチに行くときは、乾燥していますからポケットに一寸入れて、後は水と筆があればいろいろと使い勝手がいい便利さがあります。だから固形の水彩絵の具でしょうか、そのようなものだと思っていただければ良いのではないかと思います。

次に私は二月から屏風の絵を出しますので、屏風と言うのは何だということを少し調べたものをメモしてきましたので説明したいと思います。日本画の場合は今は油絵と同じで制作用のパネルは油の寸法に合わせて同じで号数で呼びます。そのパネルに和紙を袋貼りにして描いていくわけです。結局それが出来上がったらどうするかというと、額に入れて鑑賞する訳ですけども、そうなったのは新しく、油絵の考え方から来ているものなのです。それ以前はどうしていたかということ、多くの様式があるのですが、一つの例として屏風や、障壁画などがありました。日本画の大画面ということそういうものが考えられます。屏風とは何かと言うと、何時ごろから出来てどういう目的であんな形になったのだということ、説明したいと思います。

ここに屏風の「屏」というのは、辞典で調べますと「囲う」とか「覆う」とかいう意味です。そうすると部屋の中でもう一つの空間を作るために回したりするのですが、後は風除けだとか、寒ければ一寸衝立を立てると防げますが、そのようにまず実用的な機能があったはずで、それに真っ更ではと言うことで、布を貼ったりと、それが進むと何か描くとか、そういうことになったと思うのですが、家具、筆筒などと同じで調度品の一部と考え



れば分かり易いのかなと思います。原型は中国から来ています。最初は屏風と言うと、こういうふうに折り畳んでおくのですが、古い形では一つずつが独立していて皮紐とか布紐で結んであったものらしいのです。広げると一つの画面となります。結ぶために外に木枠がありますので、やんわりと繋がっているのですけれども、どうも一枚一枚独立している。それが日本になると、器用なのでしょうね、この繋ぎを和紙でうまく繋いで、蝶番になるようにしたのです。それが何時ごろのことか分かりませんが、かなり古い時代です。正倉院に鳥毛立女屏風と言う名品があり、独立した感じの古い屏風の形式だと思います。それがだんだんと発達していきます。大きくなると表現の幅が広がります。今まで一枚一枚描いていたものが全体で一つの共通テーマをもってつながっていくこととなります。

屏風の数え方のようなことを一寸書いてみました。屏風では六曲という、六枚のものが原則だそうです。それは一つの最小単位、この一枚が一扇といいます。六扇、六枚つながりのことですが、六曲これが一つの単位でこれが二つ並ぶと一双になります。そうすると物凄く横長の画面が出現するわけです。それから場合によっては二曲のものもあります。最近四曲という、昔しにはなかった型も出てきました。私も屏風の中に多くの筋が入るのは嫌だなどと思って四曲にすることが多いです。屏風の歴史からすると比較的新しい、描く方としては考えなくて、描いています。

次に障壁画です。日本画というのは言葉からいうと、多分西洋画に対して日本画という言葉が対立して出てきたのだらうと思うのですが、明治になってからです。その前の古い絵は日本画ではないのかという、そうではなく美術史から言う日本絵画というジャンルに入るのかな、日本画をやっているとして「浮世絵ですか」と言われたことがあります。「美人画は描きますか」とか言われたり、過去のいろんな絵画様式の歴史があるわけですから、知っている範囲でのジャンルを言って下さいます。間違いではないのですが、現在成り立っている日本画と結びつくのか、呼び名からして違うのか、江戸以前は各流派でよばれたり、まよっています。その中に障壁画というのがありまして、これは何で此処に出したかというと屏風とおなじく室内空間を構成するもので、これは日本独特だと思います。外国でも壁に絵を描く例は沢山あるのですが、日本の場合はそれが動くのです。何かと言うと襖障子、襖というのは必要に応じて左右に移動、一室が閉めることによって二室になったり三室になったり、開け放すと大広間になったりと、柔軟で、自由さが利く。そういう襖の中に絵が描かれていく。それが最も発達したにぎやかな時代が安土桃山時代です。狩野派をはじめ長谷川等伯や海北友松といった絵師が争うようにして制作していったわけです。

そこで下の方に図式を書いておきました日本画というのはどうも障壁画や、屏風を見てもそうですが、意外と横に長い。そして連続しながら限定されたものではなく、各季節が続きながら移り変わっていく、春から冬まで一つの流れがあるのです。春の草花から冬の草花まで一曲に描いてあるという感じがある。書院造りの寺院などに行きますと今度は縦にも広がります。襖の上に長押がありまして、その上に壁があってその中にも絵が広がっ

て繋がっていく。だから上下左右に広がっていく性格がどうもありそうだという、それに対して西洋画というのは、ある区切られた平面、二次元の中に奥行きを出そう、出そうと何百年もかかってやってきたわけです。日本画は横に広がるのですが、西洋画の方は何ともしても奥へ、そのための遠近法、透視図法や、色彩の濃淡による遠近法といったものを駆使して、考えに考えて成り立っている絵ではないかと思うわけです。

風景画を見るとよく分かりますが、手前が大きく奥に行くにしたがって、物が小さくなっていく。遠くなるにしたがって空気の色が薄くなっていく。静物画でもそうですが、セザンヌの絵はテーブルの上に敷布があり物が置かれている。物体があり奥には壁が書かれています。日本画の場合はよく林檎がひとつぽつんと描かれて何となく影のような隈が描かれ、「ああいいですね」となる。これは西洋画ではありえないことで、何にも無い空間に林檎が存在することはない。必ずその周りには物理的空間が設定されている、日本画にはそれがなく、あいている空間を「間」といいます。分かり難いのですが、分かる人にはわかるのです。そういう一寸ぼんやりとあいまいな、だけど世界を全部現しているというような「間」と言う中に空間を表現してしまう。左右上下で奥にいかないということ、民俗性なのかちょっとわからないのですけれど、そのように考えるとわかり易いのではないのでしょうか。

それから下の方ですが、これは素材にも絵の具にも関係してくるのですが、とにかく一番左側の方に「墨・単色」とあります。日本画の中によく水墨画と言われ、山水画と言われることもあります。墨一色で描かれています。墨に五彩ありと言うのですが、分かる画もあれば、描いてあるものは分かるのだが、いまいち意味が分からない。古い絵はいい絵ですねと言うような感じで、ある種それを理解するために、こちらに鑑賞の心がまえがなければと言うことがあります。西洋画においては単色、墨でも鉛筆でも何でもいいのですが、それで描かれたものが完成した絵画ではなくて素描、デッサンという考えの違いがあります。日本画の墨一色の対極にあるのが、右の方に書いてある金碧です。金、銀、群青、緑青、朱とか派手な色をふんだんに使った濃彩です。贅沢なものです。まだいろいろ話せばあるのですが、時間の問題がありますので、次にいきます。

これは私が持っている物ですが、これを手に入れる時、大きく迫力があるし、いいものです。ある事情で私のところに来ました。いろいろ文字が書いてありますから本画ではありません。原寸大の下図に当るもので、制作をする最後の段階大下図といいます。こういうものはあんまり鑑賞の対象にならない。研究の対象にはなるのですけれども、でもこういうふうに表装されているのは迫力がありますので、鑑賞できるようにしたものだと思います。

これはどなたかあてずっぽうでいいですから、時代とか作者とか勘でお分かりでしょうか。実はこれは、原図は丸山応挙です。本画はこれなのです。(丸山応挙展のポスターで孔雀の絵)これのもっと大きい写真がありまして、拡大してこれと照らし合わせたのですが、ぴったりと一致します。恐らくこれの原寸の下図ということであれば、私は嬉しいのです

けれど。

書かれた文字を読んでいくと彩色の指定です。これを読んでいくところはこういうふう  
に塗るんだよということが良くわかります。裏からも塗って表からも塗るのだと、これは  
絹本でどうやって描くかという、絹織物でぐにゃぐにゃしていますから描き難いわけ  
です。そこで木枠を作りそこへ張り込み描くわけですが、透けて見えますので、原寸  
大の下描を裏にあて線描をしていきます。これを外して色を塗っていくわけです。です  
から裏から塗ることも出来るわけです。仕上がったらこれをはがして裏打ちして表装  
すると完成です。

丁度今年応挙展というのをやっています、この原画が出ると思います。来年早々に東  
京江戸東京博物館に巡回しますので、この原画をよく見ていただいたらいいのではない  
かと思えます。応挙に詳しい武田先生がおられますので説明をお願いします。

一丸山応挙の「牡丹孔雀図」という応挙でも代表作で、本物は確か重要文化財に指定さ  
れているはずですが。それは三十代後半脂の乗り切った頃に描いたものでまさに堂々とし  
ているのです。大きさはこの大きさなのです。ですから、非常に堂々としています。応挙が  
その完成作を書く前に下図として描いて、自分でこういう色を使おうかなと入れ文字をし  
たとなると、これは応挙の下書きということになると大発見で実は来年どこかの新聞に載  
るかも知れないと期待しているのですけれども、もう一つは完成画があってそれを弟子が  
写したと、先生に「すばらしい作品だから模写させて私の覚えにとっておきたいから」と  
言って克明に写して絵の具までも、完成画を見ながら、弟子が完成の後に作ったという、  
二つの可能性、完成画の前であれば応挙ですし、後であれば弟子ということで、この辺が  
非常に楽しみな所です。明らかにしない所がいいですね。一

この下図があれば幾つでも出来るわけです。それで応挙は実際にもう一回描いておりま  
す。それは宮内庁所蔵で、これを縦構図にして、この雌を左側へ。この図を描いて五、六  
年後になります。それでこの孔雀のスタイルがよっぽど出来が良かったのですね、このパ  
ターンで弟子が雌を抜いて又同じように描いています。今は複写というと写真やコピーも  
どんどん出来ますが、昔は無いですから、これに薄紙を当てて手書きで写し取っていくわ  
けです。それが自分の資料になるわけです。まあそういうものと考えてください。

質問・そうすると贋物本物ということはあるかないということでしょうか、一作、二作  
があるという意味で、描いた順番があるのであって、すべて本物になるということになる  
のでしょうか？

贋物という話ではないのです。完全な贋物、悪意のある贋物ではないのです。

同じようなものが二つあるからといって、片方が贋物で、片方が本物だというわけにい  
かないですね？

私この部分の模写をやってみて、この円が一回では描けませんでした。ここは二回で

やっていることはわかるのですが、意外とやってみて分かるのです。当時は絵の具の数が現在より少ないですから色を出すために裏から補色してやるわけです。今此処にサンプルに持ってきました。これは明治、もしかしたら江戸末期くらいの絵の具かと思います。貰ったものですが、箱の中に金箔を入れる桐の箱がありました。金箔は入っていませんでしたが、蓋の裏に「嘉永三年」と書いてありました。まあ嘉永までくだらないにしても、明治の初め頃かなと考えています。この羽の色などを見ますとまさしくこういう絵の具を塗っています。これをもっと鮮やかにするために裏から墨を入れている。そうすると同じ色でも塗った所と塗らない所ではこの青色が違ってくるのです。そういうふうにして色数を増やしている。

もう一つは経師屋さんに表装年代を聞いたら五十年くらい前、戦後か戦前くらいに流行った布だと、それ以前にもう一回やっていると言うのも、これは二度目の表装であるといわれたのです。もう一つがこれは下図ですからそんなに立派な紙でなくていいわけですが、よく見ると此処を接いであります。それが新しいものでない折りたたんで、保存されていた折り目継ぎ目とは違う所で汚れが出ていたり、というのが分かります。若干切れています。だからきっと端の方はぼろぼろになって表装仕立の時切られた可能性があります。詰まってしまっているのだと思います。

本物と模写展のときに、水墨画である曾我二直庵の模写をしました。三ヶ月くらいで完成するかなと考えましたが、七ヶ月かかりました。墨色を黒くあげていくのは別に問題ないのですけれども、こういう長い線がやっぱり引けません。それが自分の絵であれば少しくらい曲がっても大胆に引けるのですが、模写は外してはいけないと思う緊張感がありますので、どうしても慎重にならざるをえません。それからこういう羽根の部分はリズムがあって崩れないです。まあいいじゃないかと思ったりするのですけれど。

応挙の場合は写生画といいまして、西洋画の意識が入っていますから見方が近代的になってくるのです。実際に見て描いています。当時は孔雀は見世物としていましたから。相当部分の写生を積み重ねてこういう構図に組み立てたものだと思います。

応挙である確証はなく、応挙とは言えない。応挙派とっておきます。これは一級の資料であることは間違いないのだけれども。

質問・もし本人のものだとしたらどんなものですか、その値段は？

羽が生えているでしょうね。

質問・下地書きするのは絹本の場合だけですか、

紙の場合もあります。紙もいろいろありまして下に滲まないように薄い紙もあるので。それから紙の場合はこういうふうには写らない場合もありまして紙自体が厚く、そうすると多分「念紙」というものを使って、今でいえばカーボン紙です。薄い紙に消し炭みたいな、木炭とか、紅柄とか、それを塗ってそれを写す間に入れて軽くとがったもので写し取るわけです。それを頼りに墨や絵具塗ったり描いたりするだろうと思います。

応挙の作品はこれでも、この以前の絵画の流れからすると凄くリアリズムですが、しか

し今見ればまあそうでもない。今では立体感や空間の意識が進んでいるので、物足りないと思います。応挙は程よい写実性と装飾性とは軟らかく納まるところが支持されるところでしょうか。

時間に急がされて何をしゃべったか、まだいろいろありますがこれで終わります。

(終わり)